ひとくち法話

宝林宝樹（ほうりんほうじゅ）

（38）

倶会一処

「年を取るのは辛いことです。でも、楽しいですよ」これは九十歳を過ぎたお婆ちゃんの言葉です。確かに年を取るのは辛いことです。耳が聞こえなくなり、目は薄くなくなってくる。このような体の衰えが、残された時間の短さを自覚させるのです。これが辛いことであるのは分かるのです。でも、それがなぜ楽しいといえるのでしょうか。

この言葉の裏には、往生という教えが大きく関係しているのです。仏教では、人が亡くなることを往生するといいます。「死は終わりじゃない。死は門なのだ。みんなその門を潜って向こうに行く。死はまさに門なのだ」という言葉が、映画の『送り人』の中で語られていました。まさにこれが往生ということです。この言葉に従うと、先立って行ったご主人は、死の門を潜って今もお浄土で生きていることになります。このことを知っていたらどうでしょうか。己の死が近づきつつあることは、それがそのまま、あの人に会える日が近づきつつあることを実感させてくれるのです。確かに、これは大きな楽しみといえるものでしょう。

お婆ちゃんのこの言葉は、本来、悲しみで終わるしかない人生の中に、無上の喜びを見出すことのできた人の言葉でした。